

## 地域におけるスポーツの普及

### ～鹿児島県樋脇町におけるホッケーの事例研究～

岡田 猛

Sport Development in Small-Town : A Case Study of Field Hockey in Hiwaki,

Kagoshima Prefecture

Takeshi OKADA

#### I. 緒言

鹿児島県の北部に位置する樋脇町。のどかな田園や森林の広がる人口約8,500人の、どこにでもみられる地方自治体といえよう。鹿児島県民でさえ、樋脇の名前を知らない人々も少なくない。このような何の変哲もない一地域に、ホッケーというスポーツが根付き、住民に親しまれている。

ホッケーはイギリスの上層階級で愛好されてきたスポーツではあるが、日本ではマイナーな位置に留められてきている。

多くの人々が、ルールはおろか、その存在さえ知らないという状況であろう<sup>注1)</sup>。

このように、いわばマイナーな地域とマイナーなスポーツが結び付き、長年にわたって地域に根付いてきたという現象は興味深い。おそらくは固有の歴史的契機と、定着・普及を可能とするような風土や環境、社会的条件がはたらいたのであろう。

近年日本においても、真の“豊かさ”とは何かをめぐって、物質中心の社会構造が見直され、クオリティ＝オブ＝ライフ、質的に生活を捉えかえそうという論議がある。このような観点からスポーツにも新たな意味づけがなされ、生活、地域と結びついたスポーツのありようが改めて追究されてきている。

樋脇という一地域におけるホッケーというスポーツの定着・普及の過程を詳らかにすることは、このような追究にも寄与することが期待されるであろう。

#### II. 高校における新スポーツの導入

樋脇とホッケーのつながりは、1951年（昭和26年）に遡ることができる。鹿児島県立樋脇高校における体育の正課として導入された。同校は1948年に東郷高校の分教場として設立され、1950年樋脇町立樋脇高校として移管創立されて、翌1951年に県立としてスタートをきったのであった。いずれにしても、ホッケー導入時の同校は新設校とほとんど変わらない状況にあったとみて間違いはないであろう。

このような状況にあった当時の樋脇高校に今日でもめずらしい種目に属するホッケーがどうして導入されることになったのか。まことに興味ある問題であるが、その際イニシエーターとしての役割を演じた前園清一氏にその間の経緯について語ってもらうことにしよう<sup>注2)</sup>。話にも出てくるように、同氏は当時同校の体育教諭として勤務していた。

こんなに大勢の皆さんの前で話をできますことを感謝いたします。樋脇町といえばホッケー、ホッケーといえば樋脇町、この言葉は全国に通じております。うれしいことではありませんか。私がこの樋脇の地に、ホッケーという「一粒の種子」をまいたのがこんなにも大きく育ったのであろうか。私は感激で一杯であります。そこで今、このホッケーという競技が、何故この地におろされたのであろうか、その苦心談をここで話してみたいと思います。

わたしは自分のことはあまり言いたくありませんけれど、関係したその間のことについて、ホッケーの由来等について話してみたいと思います。

私がこの地に御厄介になりましたのは、紹介にありましたとおり昭和24年。皆さんはどう思われますか？ 39年前のことです。

39年前と一口にいいますが、皆さんはこの世に生まれていなかったのです。39年前、その当時、樋脇高校で教えていた子は今55、56歳になっています。考えれば長い人生であったように思われますし、私は今日ここに立ったのは、今日も来た、その前もまた来たというようなことで夢にも思わなかったことです。現在もそうであります。

我が町、樋脇、この樋脇に7年間、お世話になりました。7年間という期間、あつという間です。私は何故、樋脇にホッケーをおろしたのか？ これが問題なのです。誰もが知りたがっていることだと思えます。

当時の樋脇高校は、ちょっと歴史をさかのぼりますけれど、最初は東郷高校の分教場ということで、定時制の学校でありました。その後、昭和25年に町立の普通高校として開校になりました。その時の校長先生は、〇〇校長先生で、皆さんの知っていらっしゃる市比野の先生でした。その校長先生が学校の教育目標を掲げられました。私はこの学校をこういう学校にしたいということで、教育目標として三つのことを掲げられました。

一つは、他の学校に勝るとも劣らない生徒になって欲しいということ。二つ目は、将来この町の担い手となる人物をつくる必要があること。三つ目は、根性のある人間に育ってもらい、しっかり働いてもらわなければならない。つまり、人づくりを目標に置くということでした。

当時私は、体育の主任として、体育の目標でもこの三つの理念に叶うような教育をしなければならぬと思いました。

この目標を達成するためにはどうしても、教育の内容に触れなければならない。当時の教育内容としては、玉川学園のような近代的な教育をしたいと、口癖のように言っておられました。その目標に合わせるためには、近代的な要素をもち、立派な紳士的な内容をもつもの、そういう内容を備えた近代的スポーツをやるのが・・・そのためにはどういう種目をしたらいいのか？ 新制高校の出始めでしょう。生まれたばかりの赤ちゃんから他の高校と比べますと、どうして一足跳びにできましょうか。サッカーやバスケットなどをやってもそれだけの成果をあげるには何年かかるかわからない。そういった教育をしっかりと子どもはいじけてしまって、せっかくの高校がだめになってしまう。これではいけない。生徒にもっと誇らしく思うような高校にしたい。これが第一のねらいでした。そのためには、今まであるような部を一生懸命育てても間にあわない。教育内容もうんと新鮮にして学問的には一流大学にも多く進学できるような高校にしなければだめである。数学、国語、他のいろんな担任の先生も一生懸命生徒を育てようとしたのですが、私は体育の面ではどうしても生徒に誇りを持たそう、自信を持たそうとしました。樋脇高校の名誉を育てていけるような人物を育てなければならない。私はそう思って、実はホッケーを選んだのです。ホッケーといってもその当時は皆目県内にはありませんでした。大学でホッケーをやっているところもめずらしいぐらいでした。日本ホッケー協会ができたのも私がホッケーを始めてまだ後のことでした。ホッケーを選ぶには選んだのですが、何にもないところでホッケーといたってわかるわけがないことです。そこで、まず学校の先生達のなかにまず浸透させなければならないと考え、教頭先生に相談してホッケーを教えたいと思いますがよろしいでしょうかと聞きましたところ、「やり給え」と・・・。但し、ホッケーだけでは困るよ、他のものももっと我々がやれるようなものはないか、ということでした。

そこでバドミントン、ホッケー、門球(ゲートボール)、この三つをなんとか取り入れようと計画をたて、これをするにはどうしたらいいかと考えたときに、そこでまず生徒に、実際に体験させなければだめであると考え、そ

うわけで、ホッケーのスティックを11本とボールを1ダース揃えて、正課体育でなんとか買ったわけです。そしてその道具で、基本練習から始めました。私自身、日体大卒でしたが、その頃、ホッケーという競技を早く取り入れなければ時代遅れになるといって、寮対抗でホッケーをやった、それが初めての体験でした。しかし、私はもともと陸上部育ちでホッケーのスティックなど握ったこともないでした。そもそもホッケーがどういうものであるということや打ち方などは学びましたが、選手になる気はなかった。それを樋脇にもってこようと思った。きっとおかしいのではないかと思われるかもしれませんが、それはホッケーがもっている要素を考えたからなのです。

木でボールをたたき、ボールをキャッチする、あの曲がった変なスティックでボールをたたきゴールをすれば一点である。そのためには、非常な努力をしなければならない。フェイントもかけなければならない。たった一本のスティックが白球を追って、一生懸命動いていく、うまくつないで、ゴールまで持ち込む。11人の者がしっかり、そういうポジションを守らなければならない。そういう団体競技の特質も持っている。動作が非常にデリケートである。他人をたたいたら反則、ぶつからずにうまく走ってパスをしながら得点をする。そういうデリケートさをもっている近代的な競技であり、イギリスに発達しただけにあって紳士的である。これはどうしてもやらなければならない。そう思って、11本のスティックと1ダースのボールから始めたわけです。

正課に取り入れた、これが樋脇のホッケーを推進していくための力となったと思います。また正課に取り入れ、皆がやる、ひとり残らずやる、もちろんやると言っただけで、ゲームができるわけがない。しかし基本動作として、こんなふうにするんだと教える。生徒が興味をもってきた頃を見計らって、諸君、君たちの家は農村出身が多いだろう。今日帰ったら、父母に相談して、山で木を切ってこい、樫の木がいいだろう。こういう木を切ってこい。

生徒はすぐに切ってきました。私はそれを見て涙がでましたね。ゲームをやらずにもスティックがなければできないわけですから。早くゲームをやりたいでしょうがない。だから木を代用させて、ゲームをやらせたんです。なかには、ボールをたたけば曲がるもの、折れるもの、いろいろありました。そうこうしているうちに、昭和26年のときにぼちぼちゲームをやらせて、昭和27年には部活動にもってこようと考えたのです。いつまでも正課でやっていたのではうだつがあがらん。この辺で部をつくらうではないかと思い、生徒会にはかりましたが、まあここにお金がありません。そこで同好会にしてくれと言いました。予算がないが、それでもよければ同好会をつくりなさい。ホッケーの良さがわかっているから、皆喜んで同好会でもよいからということになり、初めて同好会が発足しました。

その後も試合をしたいが、相手がいない、対校試合をやるうにも試合ができない状況にありました。その時鹿児島商業がホッケーを作ろうという噂は聞いていたのですが、まだできていませんでした。そんななかで翌27年に部に昇格させてもらいましたが、相変わらず予算は少なく何も買えない状況でした。それでも、だんだんと道具を揃え、ゴールポストを木で作って揃えていったのです。

その頃の生徒は張り切っていましたよ。「よしやるぞ」という気がありました。そこで技術的にはホッケー協会がスティックなどの世話をしてくれましたが、なかなか高く買えませんでした。しかし、なければできない。注文するインド製スティック、これが一番よいのです。それを一本もらって指導を受ける。福岡の三菱化成から指導に来てもらったりしたものです。実業団としては強かった。ここに頼んで練習をさせてもらったのです。わざわざ樋脇まで来てもらいました。その時には樋脇の校庭も広く作ってもらい、運動場をだんだん広げてもらいました。当時は山の向こうに池があり、それも埋めてもらい、立派なコートができました。立派なコーチをよんで、さあこれからとなりました。

またホッケー協会にも東京から人を派遣してもらい、コーチをしてもらいました。そうこうするうちにも、それでもまだ足りない。技術を習いたいにも、その状況がわからない。当時のキャプテンの〇〇という人が熱心で夏休みなどを利用して、山陽高校を見て練習を教えてもらおうと言ってきましたが、予算がないと言いましたら、自費でも行くと行ってきました。当時の名門校を見ながら技術を覚えていきました。

ホッケー部も強くなってきました。遂に、昭和30年になりまして、国体にやっと出られるようにしてもらいました。私も指導者という立場で出ましたけれど、福島の高校と当たり、あつという間に勝ちましたが、2回戦は負けました。自信をもつようになってきました。並々ならぬ苦勞もありました。さらに大事なことは、樋脇町の皆さんがホッケーというものの内容をしっかりつかんで理解してもらうに限ると思ったんです。そのために、昭和27、28年頃に体育祭にエキジビションとしてホッケーを披露し、ゲームをやりました。皆に見てもらいたくて、その時は解説つきで行いました。ゲームの内容、規則などを理解してもらいながら実施しました。

さらに大事なことは、当時の樋脇町の為政者の方々、一般の人々がホッケーに理解を示し、そしてしっかり後押しをしてもらったからだと確信しております。こういう方がいなければ、現在の樋脇のホッケーは生まれていなかったと思います。皆さん、今のこのホッケー人口をご覧ください。私たちが高校で始めたときと比べて雲泥の差を、し

かも町長はじめ教育界の方々はもちろん、一般の方々の後押しがあればこそ、現在の樋脇町の町技として、これが残されたと思うのです。ただ単に皆さんが試合に出て、勝った、負けたというだけではないのです。その陰には、強力な後押しがあるのです。これを忘れないようにしてもらいたいと思います。

これからも樋脇のホッケーが、ますます人口を増して、もうホッケーを知らなければ、樋脇には居られないというくらいになる時がくるかもしれないと思うのですが、皆さんもその気になって、ホッケーをますます大切にして、ホッケーのもつ精神を皆さんの生活のなかに取り入れて、発展していただきたいと思います。樋脇町もそれに伴ってますます発展していきますよう、樋脇町のホッケー、町技としてのホッケー、さらにホッケーを通じての樋脇町、これは切っても切れない縁でございます。

どうかこれからも、しっかりと根をおろしてもらって、ますます町が栄え、ホッケーが発展していきますことをお願いしまして、講演を終わりたいと思います。ありがとうございました。

誕生して間もない高校の生徒に、他の伝統ある学校に伍してやっていける自信と誇りをもたせるために、体育では何ができるのか。サッカーやバスケットボールのような、伝統ある高校で既に長く行われてきたメジャースポーツでは、追いつくまで何年かかるかわからない。いつまでも後追いの状況ではかえって生徒達をいじけさせてしまうことにもなりかねない。

ここに他の高校ではあまりまだやられていないマイナーなスポーツでなければならなかった理由があったのである。

それではどうして当時でもめずらしいホッケーが選ばれたのであろうか。前園氏は「ホッケーのもっている要素」に注目した。それは、団体競技としての特質、動作のデリケートさ、イギリスに伝統的なジェントルマンシップである。用具、練習方法など、マイナーでハイクラスなスポーツを一地域でやることゆえの困難、およびそれへの対応過程なども、当時の生活背景などともに、興味深い内容の話になっている。

一般に体育教師は自らの経験種目に依拠しがちになると考えられるが、前園氏にほとんど自身の経験のないホッケーをとりあげさせたのは、前述の問題意識の強さ以外には考えられない。もちろん、述べられているような学校としての三つの目標にも支えられてのことであることは言うまでもない。

運動部活動の母校アイデンティティー形成機能という、今日でもヴィヴィッドな研究課題ともなりえる現象が、素朴なかたちで提供されているといえよう。

このようにして導入された樋脇高校のホッケーは、当初の前園氏の意図をもはるかに越えて、目覚ましい実績を築いてきている。表-1は主な大会における成績をまとめたものである。

表-1 樋脇高校のホッケー部主要成績

年	全国高校総体	国民体育大会	全国高校選抜大会
1955		初出場	
1959		4位	
1966		4位	
1968		3位	
1969		2位	
1970	2位	1位	
1971	1位	3位	1位
1972	3位	1位	2位
1973	2位	1位	
1974	3位	3位	
1975		1位	
1976	1位	3位	2位
1978	3位	2位	
1979	2位	1位	3位
1980			3位
1981		1位	4位
1982	2位	2位	2位
1983		1位	2位
1984	3位	3位	3位
1985	4位	3位	3位
1986		3位	4位
1987	4位	1位	
1988		3位	
1989			2位
1990	2位		1位
1991		1位	
1993		4位	

ホッケーの世界では、有力な伝統校としてその名を全国に知られるようになってきている。鹿児島でも、大会の度に地元新聞で報道され、国体における鹿児島県の得点源として貢献している。地元樋脇では、全国大会の時期には町の有線放送で結果がその日のうちに知らされ、町民はホッケーの話題でもちきりになる。自治体は相応の経済的援助による支援体制を整え、バックアップしている。

鹿児島県で名誉ある賞とされる「南日本スポーツ賞」が1973、1975、1976、1979、1983、1987、1990の各年度に授けられ、このこともまた同校、樋脇町の誇りとなっている。

### Ⅲ. ホッケー部員の心情点描

伝統ある名誉といっても具体的には各々のプレーヤーにおけるその実体化を欠いては成り立たない。ただプレーヤーにおける実体化を促す様々な社会的条件、いわば、学校を含めた地域社会におけるそのための仕掛けの枠組みが背景にあって伝統や名誉の内実を形成しているのはいうまでもない。

このような文脈においてみた場合、伝統や名誉を担わされている当のホッケー部員はどのような心情のもとで部活動を展開しているのだろうか。

また、運動部活動は発達期にある高校生の活動欲求を満たすだけではない。その活動の成果がプレーヤーのキャリア形成に有意な寄与をなすことがある。いわゆる運動部活動のキャリア形成機能である。指導者や、特に保護者はそのことを考慮のなかに入れていた場合も多いと思われるが、当の運動部員はその点をどう認識しているのだろうか。

以上の問題意識のもとに、運動部を引退したばかりの部員にインタビューを試みた。

社会人としてホッケーを継続していくことになっているU君である<sup>注3)</sup>。

高校に入ってからホッケーを始めた。それまで、中学時代に「ホッケー祭り」で1回プレーしただけ。高校入学後もそれまでのサッカーを続けるつもりで、初め1週間はサッカー部で活動。高校の同級生、中学時代の先輩から誘われ1日だけホッケーをやってみた。楽しかったので入部することにした。中学の先輩とは、小学校からずっとホッケーをやっていて、中学校3年次からたまに高校ホッケー入部の声をかけてくれ、今は福岡の実業団で活躍しているひとである。

小学校3年(スポーツ少年団)から中学(スポーツ部)まではサッカーをやっており、副キャップをした3年時、県大会で初優勝を果たし、九州大会(1回戦敗退)にも出場した。樋脇高校ホッケー部の存在は中学校になってから知った次第である。

高校での練習は月～金曜日は学業終了時4時頃から日没まで。土曜日は午後から日曜日は午前9時から、それぞれ5時30分までであった。練習後はへとへとになった。しかし、辞めようと思ったことはなかった。

Jリーグの現況をみてサッカーを続けておればよかったとまでは思わない。

1年時には1回補欠として沖縄へ遠征した。

2年からはライトハーフとしてレギュラーの座を獲得した。

一番価値のある国体での成績は1年次ベスト4、3年次1回戦敗退であった。2年次は欠場。

インターハイでは1年次、2年次それぞれ2回戦敗退。3年次でベストエイト。

全日本高校選抜大会(新人戦)では2年次九州予選敗退、3年次全国大会1回戦敗退。他のスポーツもある程度こなせ、学科では体育、数学が得意であった。テスト勉強は1週間の試験休みにおこなった。

